

1. はじめに

2018年12月、台湾の屏東大学で行った「キャラクターおにぎりプロジェクト」は、「日本の食材を使ってキャラクターおにぎりを作って食べることで交流を図る」ことを目的としたワークショップである。これは、大阪教育大学と屏東大学の学術交流の一つとして実施した。この交流は2013年から行われており、国籍や言語を超えて「五感で理解する」ことを共通のテーマとして毎年学生が中心となって実施している。昨年までは、視覚、触覚、聴覚、嗅覚を使って行われてきたので、今回は味覚に着目した。

次にもう一つの軸として日本文化を紹介するため、日本のキャラクター弁当文化を紹介することにした。このような造形性を重視したお弁当は美術を専攻している屏東大学の学生にとって親しみやすいのではないかと考えた。今回は活動時間を考慮して、キャラクターおにぎりを作ることで「キャラ弁」文化を体験してもらうことにした。

2. ワークショップ

- (1) 日本のキャラ弁の紹介
- (2) ワークショップの手順の説明
- (3) ご飯と好きな食材を使ってキャラクターを制作
- (4) おにぎりを好きな弁当箱に入れ、写真撮影
- (5) タイトルをつけ、インスタグラムの共通アカウントにアップロード
- (6) 作ったおにぎりを各自食べながら、作品の鑑賞
- (7) 交流会の後、片付け、終了

手順の説明はパワーポイントで作成した資料を用いた。イラストや写真、動画など視覚的に伝わりやすいものを多く取り入れた。また、説明時は日本語と台湾語の同時通訳をしたが、スライドの言語は台湾語で統一させた。食材については白米以外の食材は全て日本から持参した。

3. 総括

屏東大学の学生の感想には「(おにぎりを)作ることと食べることが同時に楽しめるのが最高だ」「台湾では見たことも、食べたこともない食べ物が目の前に並んでいるのは奇妙な体験だと思う」といった意見があった。日本文化の紹介と交流という面では一定の成果を得られたといえる。

おにぎりの画像に作者名とタイトルを付け、インスタグラムにアップロードしたことによって、作品制作の記録と活動後も共通の思い出として残すこととした。加えて、SNSを通じて今回の活動を広く公開し、インターネットを活用したワークショップの一例ともなった。

「五感で理解する」アート活動という側面では、おにぎりという食べ物をキャラクター化することで、本来味覚優位である食材を視覚優位の造形物に変換するという、価値の組み換えが行われた。そして最終的には皆で食べるという味覚の活動に戻っていくという意識の変化が感じられる興味深い活動となった。また、アート活動を用いたコミュニケーション方法を模索する貴重な機会にもなった。これらの経験をこれからの美術教育研究に活かしていきたいと考える。最後に、活動に参加・ご協力いただいた屏東大学の学生ならびに教職員の皆様がこの場を借りて心より感謝を申し上げたい。

キャラクターおにぎりプロジェクト

ARTをEAT!?

大阪教育大学 × 屏東大学

大学教養学研究所美術教育専攻：中村幹史、宮崎、平井崇彦、平松純子、向井優希、吉田悠生

芸術文化専攻：原谷和佳穂、森本佳穂
教員養成課程美術教育専攻：宇原四田生、小中純彰、松下山穂

場所：屏東大学（台湾） 参加人数：28名 実施日：2018年12月12日



2-(6)



2-(3)



2-(4)



2-(5)



2-(5)



素材キャプション



インスタグラムのアカウント
http://www.instagram.com/ch_onigiri